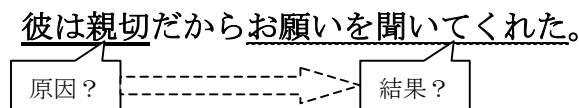


強者の戦略

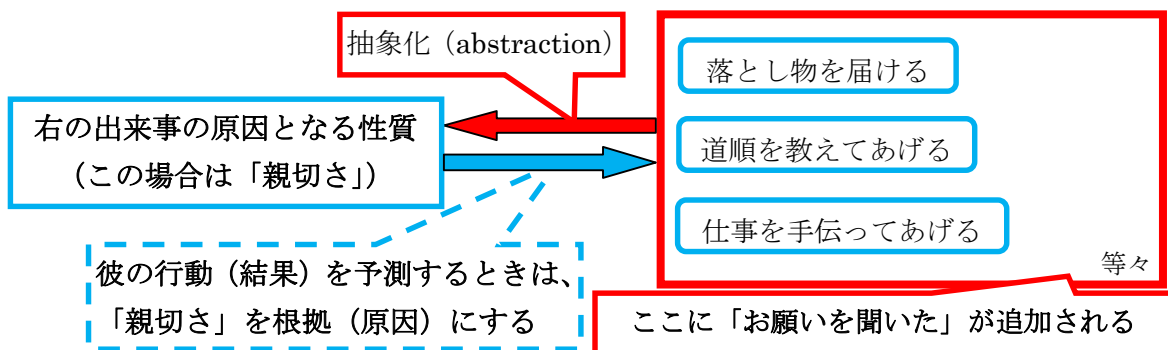
「人間とは〇〇である」、という格言があります。「人間は社会的動物である」(アリストテレス) 然り、「人間は万物の尺度である」(プロタゴラス) 然り、「人間は考える葦である」(ブレイズ・パスカル) 然り。個人的に好きなのは、松田優作の「人間は二度死ぬ」です。知らない人は、せっかく今ブラウザを立ち上げているのですから、読後に検索してみてください。

私自身が「〇〇」に入れる言葉を考えるなら、「人間は原因を求め続ける動物である」と答えるでしょう。かつて火山噴火や地震のメカニズムが分かっていなかった頃、私たちの祖先はそれらの天変地異を「神の怒り」だと考え、神の怒りを静めようとしてきました。「神」と言えば、かつて幼い子どもが行方不明になったとき、「神隠し」という言葉が使われていました。本来なら「原因不明」の一言で片付けるべき事柄に、祖先は「神」を持ち出すことで合理的説明を与えようとしていたことが窺い知れます。もちろん、現代において非科学的な因果関係はなかなか受け入れられないでしょう。ですが、私たちが人の性格や性質について語るとき、厳密な意味で科学的ではない、素朴な因果関係を読み込もうとすることが多々あります。

「彼は親切だからお願いを聞いてくれた」という文で考えてみましょう。



この文を見ると、彼が親切であることが「原因」で、お願いを聞いてくれるという「結果」がもたらされた、という趣旨の内容のように見えます。ですが、この因果関係は必然的だと言えるでしょうか。ここで恩を売っておこうという打算からお願いを聞いた、という可能性もあるでしょうし、断ったらひどい目に遭わされるからやむを得ずお願いを聞いた、という可能性もある筈です。それにもかかわらず、「親切だからお願いを聞いてくれた」と話し手が判断したのは、彼が普段から「親切だ」と思われる言動（「落とし物を届けた」「道を教えてあげた」等々）をしていたからでしょう。今までの言動から垣間見えていた「親切さ」が、今回の「お願いを聞いた」という彼の行動にも影響した、と話者は考えたのでしょう。



ところで、このような因果関係は厳密な意味で科学的ではない、と述べました。その理由は、因果関係の推認が科学と比べてあまりに不確実だからです（より正確に言えば、再現性がない）。上の文の場合、彼の親

強者の戦略

切さを表すとされていた出来事が彼の全く別の側面を表していると判明したら（落とし物の中から金目のものを盗っていた、わざと間違った道順を教えていた、仕事を手伝うふりをして仕事を妨害していた）、彼の「親切だ」という評価は即座に撤回されるでしょう。つまり、私たちは不確実な証拠の中で、その時点で妥当と思われる結論を出し、それに基づいて行動しているのです。勿論、後になって新証拠が見つければ、それに基づいて再評価を行うことになります。もっとも、「親切だ」と思われている人が2・3回くらい不親切な言動をしても容易に評価は変わらないでしょう。その人が背負う歴史が長ければ長いほど、その人の評価を変えることは難しくなります。

今回取り上げた文章は、人間がもつ上述のような側面を比喩的に説明したものになっています。かなり前置きが長くなったので、問題の解説に入りましょう。

今回の問題を改めてみておきましょう。

問 下線をほどこした部分（1と2）を和訳せよ。

Man is a history-making creature who can neither repeat his past nor leave it behind; at every moment he adds to and thereby modifies everything that had previously happened to him. Hence the difficulty of finding a single image which can stand as an adequate symbol for man's kind of existence. (1)If we think of his ever-open future, then the natural image is of a single pilgrim walking along an unending road into hitherto unexplored country; if we think of his never-forgettable past, then the natural image is of a great crowded city, built in every style of architecture, in which the dead are as active citizens as the living. The only feature common to both images is that both are purposive; a road goes in a certain direction, a city is built to endure and be a home. The animals, who live in the present, have neither cities nor roads and do not miss them; (2)they are at home in the wilderness and at most, if they are social, set up camps for a single generation. But man requires both; the image of a city with no roads leading away from it suggests a prison, the image of a road that starts from nowhere in particular, an animal trail.

下線部は2箇所のみですが、ここでは1文ずつ見てゆきます。

〈1文目（前半）〉

Man is a history-making creature (who can neither-repeat his past <nor> leave it behind;)

S V C

behind;

/副詞/

〈訳例?〉

人間は、過去を繰り返すことも捨て去ることもできない、歴史を作り出す生き物である。

限定用法? 継続用法?

leave behind A 「Aを置き去りにする」

強者の戦略

1文目を解釈する上で最も重要なポイントは、関係詞節の処理です。〈訳例?〉は限定用法として、つまり「a history-making creature」を具体化するものとして捉えています。一見これでも問題ないような気がしますが、果たして本当にそうでしょうか。限定用法として解釈した場合、1文目は次のような解釈の余地を残すこととなります。

「過去を繰り返したり捨て去ったりすることのできる、歴史を作り出す生き物もいる?!」

限定用法は、先行詞が表すものを関係詞によって具体化する用法です。例えば、「**Look at the boy who is walking in the park.**」であれば、「(他にも少年はいるけど) 公園を歩いているその少年を見て」というニュアンスをもっています。継続用法の場合はどうかと言うと、「**Look at the boy, who is walking in the park.**」を訳すと「その少年を見て。公園を歩いていますよ」となり、限定用法のような含意をもちません。

今回の文の場合、継続用法で訳するのが適切でしょう。

〈訳例〉：人間は歴史を作り出す生き物であり、(そして人間は) 過去を繰り返すことも捨て去ることもできない。

「関係詞の前にカンマがついていたら継続用法」と覚え込んでしまっていて、継続用法の可能性に思い至らなかった人もいるかもしれませんが、そんな盲信はさっさと捨ててください。むしろ、和訳問題でないならば関係詞節は全て継続用法で処理してしまった方が効率的です。表面的な構造だけを見て訳出するようでは、強者とは呼べません。

セミコロン (;) の後ろも見てゆきましょう。セミコロンは前後の文に何らかの論理的関係があることを暗示しますが、この文の場合は、抽象—具体関係になります。「過去を繰り返すことも捨て去ることもできない」とはどういうことなのかが具体化されています。

〈1文目 (後半)〉

at every moment he adds to Δ <and> thereby modifies everything (that had previously happened to him.)
/ 副詞 / S V 前 /副詞/ V O (V) /副詞/
(V) /前置詞句/

〈訳例?〉

どの瞬間も、人は以前に自分に起こったこと全てを追加し、それ故にその全てを修正する。

文法上のポイントは、「adds to」と「modifies」の並列関係を捉えることくらいです。ただ、「everything」が何を表すかを考えないと、〈訳例?〉のようなボンヤリとした訳になってしまいます。1文目前半の内容から、「自分の身に起こったこと」が「歴史」のパラフレーズであることが分かったのでしょうか。また、「add」

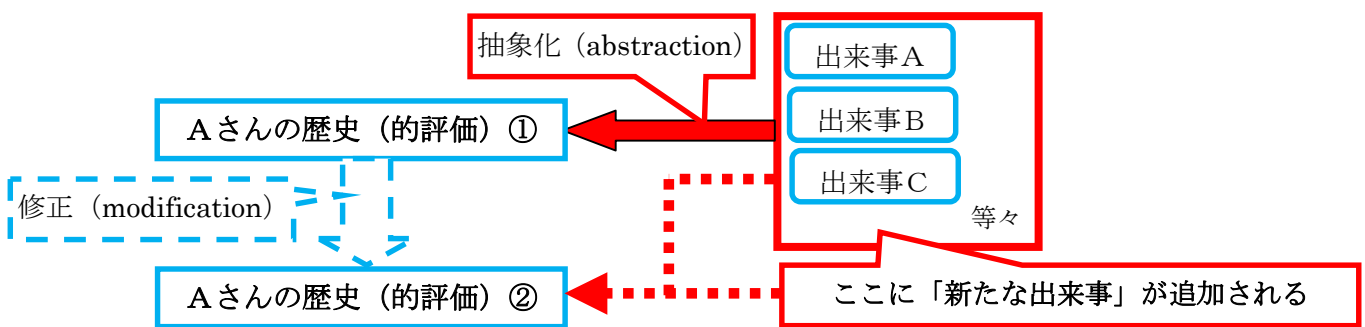
強者の戦略

の語法に注目することで、訳にもう一工夫できます。「add A to B」で「BにAを追加する」なので、Aに当たるものを追加すると、より理解しやすくなるでしょう。

これらのポイントを踏まえて訳出すると、次のようになります。

〈訳例〉：人間は常に、以前自分の身に起こった事柄全体（＝歴史）に〔新たに経験した事柄を〕追加し、それによって〔歴史〕全体を修正する。

ちなみに、前置きで話した「親切さ」の図式をこちらに転用すると、次のようになります。



これは何も親切さのような心的性質や歴史的评价に限らず、人文科学全般に広くみられる概念形成の手法の1つです。特に歴史的事実には、再現性がありません。同じ状況を再現することができないので、ある歴史的事実が起きたのが必然か偶然かを判定することができませんし、その出来事を引き起こすのに決定的な要素が何かを検証することもできません（例えば、坂本龍馬がいなかったら明治維新は実現しなかったのかを検証する唯一確実な方法は、坂本龍馬の居ない幕末を再現することでしょう。でも、どうやって？）。もっとも、最近は自然科学の成果を積極的に採り入れるようになったため、その成果に矛盾するような証拠をもつ仮説は再検証されることになりましたが…。

2文目に移りましょう。

〈2文目〉
Hence the difficulty of finding a single image (which can stand as an adequate symbol for
/副詞/ S? (V) (O) (v) /前置詞句/
man's kind of existence.)
抽象-具体

〈訳例?〉
従って、人間のような種類の存在者を表す適切な象徴として成り立つことのできる単一のイメージを見出すことの困難。

強者の戦略

この文で注意すべきは、「Hence」の後ろに文がないように見える点です。「Hence 名詞」は「come」などの動詞が省略された形なので、訳す際は「hence」以下を文として捉え直す必要があります。例えば、次のように。

〈訳例〉：従って、人間のような種類の存在者を適切に表す単一のイメージを見出すのは難しい。

3文目が、肝心の和訳問題になっています。セミコロンがありますので、前後に分けて見てゆきましょう。

〈3文目（前半）〉

(1) /If we think of his ever-open future/ then the natural image is of a single pilgrim
接 S' V O' /副詞/ S V C

(walking along an unending road into hitherto unexplored country;)

(V) /前置詞句/

of+名詞（年齢・色彩・形状・職業・役割など）
「名詞の性質をもつ」

〈訳例？〉

もし（我々が）人間の常に開かれた未来を考えるなら、自然なイメージは、果てしない道を歩き続けて、これまで人跡未踏の土地に入ってゆく独りの巡礼者のようなものである。

文構造的に特別難しい点はありません。「walking」以下が分詞になっていますが、これもごくオーソドックスなもので、特筆すべきことはありません。重要なのは、直訳としては特に問題ないように見えても、文章全体の中でこの訳を見たときに違和感があるということです。特にif節の「もし（我々が）人間の常に開かれた未来を考えるなら」は、明らかに浮いた印象を受けます。3文目は、2文目の「人間を表すイメージを探すのは難しい」という内容を具体化した箇所です。そして、1文目で既に人間の特徴は2つ挙げられていました。1つは、歴史を作り出すこと。これは、未来を創造する、と言い換えても良いでしょう。そしてもう1つは、経験を通じて歴史全体を修正すること。「人間の常に開かれた未来」というのは、前者を指していると考えられます。そして後者は、3文目の後半に対応してきます。

このことを踏まえて訳を一工夫しますと、次のようになります。

〈訳例〉：人間の未来は常に〔可能性が〕開かれていると考えるなら、そこから（自然と）浮かぶイメージは、果てしない道を歩き続け、前人未踏の地へと分け入ってゆく独りの巡礼者の姿である。

「開かれた」のニュアンスを汲み取るなら、「可能性が開かれている」といった訳出をすると良いでしょう。また、「natural image」を「自然なイメージは」と直訳するのではなく、「（自然と）浮かぶイメージは」と意識しています。

強者の戦略

後半に移りましょう。

〈3文目 (後半)〉

if we think of his never-forgettable past, then the natural image is of a great crowded city.

/接 S' V' O' //副詞/ S V C

(built in every style of architecture) (in which the dead are as active citizens as the living.)

(V) /前置詞句/

前 関 (s) (v) (c) /接 (s) /

継続用法で訳出

〈訳例?〉

もし(我々が)人間の決して忘れることの出来ない過去を考えるなら、自然なイメージは、あらゆるスタイルの建築物が建っている非常に密集した都市で、そこでは死者が生者と同じくらい活発な市民である、というものだ。

この箇所も if 節に工夫が必要です。このままだと、「人間には決して忘れることの出来ない過去の出来事がある」という内容だと誤解されてしまいます。3文目前半に合わせて、次のように訳してみましょう。

〈訳例〉: 人間は過去を決して忘れることができないと考えるなら、そこから浮かぶイメージは非常に密集した都市で、そこにはあらゆる種類の建築物があり、死者も生者と同じくらい活発に活動している。

1文目に「過去を繰り返すことも捨て去ることもできない」とあったのも、上のような訳を作る上でのヒントになった筈です。

下線部(1)はここまで。4文目に移りましょう。

強者の戦略

〈4文目〉

ここでは抽象-具体のサイン

The only feature (common to both images) is [that both are purposive; a road goes in a certain direction, a city is built to endure <and> be a home.

S (C) /前置詞句/ V [接 (S) (V) (C)] C S' V' /前置詞句/
 S' V' / (V) (V) (C) /

〈訳例?〉

両方のイメージに共通している唯一の特徴は、両方とも目的を有しているということである。道路は一定の方向へと進んでいて、都市は存続し家であるために構築されている。

セミコロンの後ろの意味が、このままだと掴みづらいですね。「目的を有している」と言っているのに、「道路は一定の方向に進んで」いるとはどういうことなのでしょう。この道は、3文目前半の巡礼者が歩く道を指しています。ならば、巡礼者が進む道の先にあるのは「聖地」ということになります。都市についても、もうちょっと目的が明示化されるように訳してみましょう。

〈訳例〉：両方のイメージに共通する唯一の特徴は、[巡礼者も都市も] どちらも目的を有していることである。例えば、[巡礼者の進む] 道はある方角 (=聖地) へと進んでいるし、都市は(人々が) 生存し、住み処とするために構築されている。

5文目に移りましょう。

〈5文目 (前半)〉

The animals, (who live in the present,) have neither cities <nor> roads <and> do not miss them;

S (V) /前置詞句/ V /副詞/ O V O

継続用法で訳出

〈訳例?〉

現在に生きている動物は都市も道もどちらも持たず、それらを見失うことはない。

この文の注意点は2つ。1つは、who 以下を継続用法で訳すこと。「現在に生きている動物」とすると、「現在に生きていない動物」の存在を暗示することになってしまいます。また、「現在に生きる」というのも字義通り受け取るとよく分かりません。これは、人間が未来と過去への働きかけを行っているのに対し、動物にはそれが無い(→だから現在のみ)という趣旨になります。それでは、質問です。今この瞬間だけを考えて生きている状態を、貴方ならどのように表現しますか。もう1つは、「都市も道もどちらも持たず」とありますが、もちろんこれは字義通り受け取ってははいけません。都市とは「過去の蓄積であり、拠り所」を暗示していて、道は「その先にある目的地」を暗示しています。

以上のポイントを意識して訳出すると、次のようになります。

強者の戦略

〈訳例〉：動物は利他的に生きているので、都市 [つまり過去の蓄積であり拠り所] も道 [つまり人生の目的] ももたず、(それ故に) それらを失うこともない。

[] 内の語句を訳出しなければならない、という訳ではありませんが、このニュアンスが掴めていないと、続く下線部(2)の訳がグダグダになってしまいます。例えば、こんな風に。

〈5文目 (後半)〉

(2)they are at home in the wilderness <and> at most, /if they are social,/set up camps for a
S V /前置詞句/ /前置詞句/ /前置詞句/ 接 S' V' C' / V O /
single generation
前置詞句 /

〈訳例?〉

彼らは荒野でくつろいでいて、せいぜい彼らが社会的なら、単一の世代のためにキャンプを用意する。

〈訳例?〉は採点上の重要なポイントを全部外す形で書いています (他の箇所も同様です)。もしこちらに似た訳を書いてしまったなら危険信号ですのでご注意ください。

まず、「at home」は確かに「くつろいで」という意味のイディオムですが、ここでは直訳気味に「住み処として」と訳すべきでしょう。この文は5文目前半の「動物は都市をもたない」を受けた内容です。都市に住んでいないなら何処に住んでいるのかを述べる箇所なので、「くつろいで」と訳すと台無しになってしまいます。そこそこの語彙力が備わってくると、逆に語彙力に振り回されて文脈を無視した訳を作ってしまう人が少なくありません。貴方は、大丈夫ですか？

次に、「at most」の訳出の位置がおかしいです。「at most」の直後に if 節が挿入されているので一見分かりにくいですが、ここでの指示対象は「set up」です。

最後に、「camp」を直訳するのはNGです。「they」は当然動物を指しているなので、動物がキャンプをするというのはさすがにおかしいでしょう。ここで言わんとしているのは、複数の世代に渡って住み続けるほどしっかりとしていない、という意味で簡素な住まいということでしょう。

以上を踏まえて訳出すると、次のようになります。

〈訳例〉：動物は荒野を住み処としていて、社会性のある動物であっても、ひとつの世代のために野営地のようなものを作るのがせいぜいである。

下線部は最後まで続きます。6文目に行きましょう。

強者の戦略

〈6文目〉

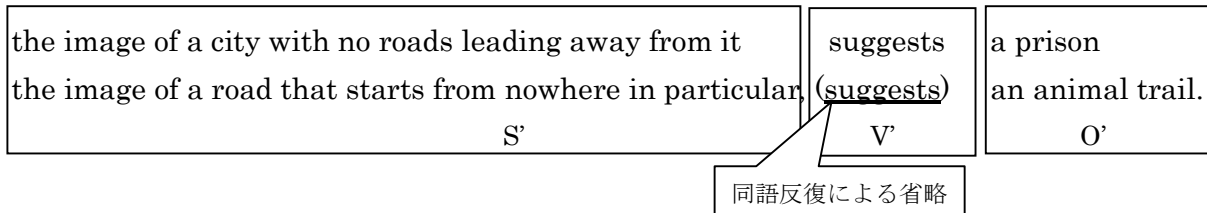
But man requires both; the image of a city with no roads leading away from it suggests a prison, the image of a road (that starts from nowhere) in particular, an animal trail.

接 S V O S' (前 名詞 (前 (s) (v) 副詞 /前置詞句/)) V' O' S' (前 名詞 (V) /前置詞句/ /前置詞句/)

〈訳例?〉

しかし、人間は両方を必要とする。都市から離れる道のない都市のイメージは牢獄を提案し、どこからも出発しない道のイメージは、特に、獣道である。

この文での注意点は2つです。1つは、「suggest」の訳出です。〈訳例?〉では「提案する」と訳していますが、もちろんこれはNGです。「suggest」には「暗示する、示唆する、連想させる」といった意味もあるので、今回はこちらの方が適しているでしょう。もう1つは、「the image」以下の構造です。



この文構造が見えていなかったら、〈訳例?〉のような悲惨な訳になります。

以上を踏まえて訳出すると、次のようになります。

〈訳例〉:しかし、人間は両方を必要とする。都市から出る道のない都市のイメージは牢獄を連想させるし、特にどこにも繋がっていない道は獣道を連想させる。

いかがだったでしょうか。今回の文章は下線部の訳出が難しいというよりは、前後の文脈を踏まえた上で訳語を吟味する必要がある、という意味で難問の部類に属する問題でした。もっとも、この程度の難易度であれば最近の京都大学でも十分出題される可能性があります。

とはいえ、過去問を闇雲に解きまくれば合格に足りる力が手に入る訳ではありません。出題された文章の根底に流れる学問のエッセンスを汲み取って初めて、京都大学が貴方に求めるものが理解できるのです。

それでは、今回はここまで。また次回お会いしましょう。